

平成30年6月25日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25360040

研究課題名(和文) Gatekeeper概念を組み込んだ行動変容理論による父親の家事参加行動の研究

研究課題名(英文) Study of father's participation of household work employed behavior change theory and maternal gatekeeping

研究代表者

高橋 桂子 (Takahashi, Keiko)

実践女子大学・生活科学部・教授

研究者番号：50311668

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：家事分担して働く妻をサポートしたいとする男性割合は増加傾向にあるが、男性の家事参加の増加を示すデータはない。これは態度と行動にギャップがあることを示している。本研究では行動変容理論の1つであるTRA理論を援用し、個人属性や妻のゲートキーピングから「行動意図」に影響を与える要因を探り、それを媒介変数として妻の出産意欲、継続就業意欲や管理職意欲に対する影響を検討した。その結果、家事労働が好き、楽しいといった態度や家事労働に対する自信は家事労働に対する行動意図にプラスの、妻のゲートキーピングはマイナスの影響を与えること、子育てより家事を分担するほど妻の出産意欲向上に影響を及ぼすことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The ratio of men who would like to share household work and assist their employed spouses has been consistently increasing. However, little evidence shows the increase of fathers' participation of household work. These facts suggest that there is a gap between attitudes and behavior. With a framework based on one of behavior change theory, TRA, we first analyzed the effects of intension of their attributes and maternal gatekeeping. Using them as the mediated variables, we investigated the effect of wives' intention to give birth and continue to work. Empirical analyses revealed that "attitudes," such as "like," or "fun," and "confidence ability," of household work were significantly positive association and maternal gatekeeping was significantly negative associated with "intention," to participate household work. Furthermore, we found that household work had more impact on wives' willingness to give birth than child rearing.

研究分野：ジェンダー、生活経営学、女性労働論、家族社会学

キーワード：父親の家事参加 ゲートキーピング 行動変容 TRA理論 出産意欲

## 1. 研究開始当初の背景

既婚女性の労働市場への継続的な参加に伴い、家事・子育てといった家庭内労働への男性の関与を増やすことが求められている。男女とも女性は出産後も職業を続けることを支持する割合は専業主婦になることを支持する割合を上回り(内閣府『男女共同参画に関する世論調査』)、父親が「子育て・家事に今以上に関わりたい」とする割合は過半数を示している(54.2%、ベネッセ教育開発研究センター2009)。東京都に居住する男性を対象とした調査では、経済不況と雇用不安が強まる中、「稼ぎ手」意識は代替されない男性性として認識されている一方で、女性の継続就業を支持し、子育て・介護といったケア認識に新しい動きがあることを指摘している(目黒・矢澤・岡本 2012)。それにも関わらず、男性の育児・家事頻度の実態、平均時間や行為者率といった統計(総務省統計局『社会生活基本調査報告』)は大きな変化は読み取れない。つまり、「意識」の上では既婚女性の継続就業を支持し、自身ももっと子育て・家事に関わりたいと回答しているにもかかわらず、育児・家事頻度の実態といった「行動」に変化が確認されない。なぜなのか。この点を理論と実証の両面から検証を行う必要がある。

加えて、既婚女性の就業継続が伸び管理職割合も順調に伸びている今日、男性の家事・子育て参加促進が思わしくない場合の代替案の検討も求められる。学際的な観点からの検討が必要である。

## 2. 研究の目的

本研究では、以下の2点を明らかにする。

第1点は、父親の家事参加に関する TRA (theory of reasoned action)を援用した実証研究である。TRAとはFishbeinとAjzenが1975年に提唱した自発的な意思に基づく人間行動を予測するモデルの1つである。このモデルの特徴は「態度・意識」が「行動」に直接、関連するのではなく、「態度・意識」が行動しようという「行動意図」に有意な影響を与え、「行動意図」が「行動」に影響を与えるとする枠組みである。換言すれば、育児・家事に関わろうと考えるようになると、それが直接的に育児・家事参加行動として表れるのではなく、育児・家事に関わろうという本人の自発的「行動意図」が形成されて初めて、育児・家事への関与が出現する、というものである。

このモデルで実証研究を行う。Gatekeeper 尺

度を構築し、母親の Gatekeeper が父親の家事参加に与える影響、父親の家事参加が子の社会性、妻の出産意欲、継続就業や昇進意欲に与える影響に関して調査を実施する。

第2点は、男性の家事・子育て参加促進が思わしくない場合の代替策の検討である。既婚就業女性の double burden の軽減は喫緊の課題である。そこで、父親の家事参加が進まないのは調理スキルに対する自信がないとの仮説のもと、父親の調理力向上を目指した実践活動を実施する。文化的親和性の高い東南アジア地域の取り組みに着目して諸外国の動向から示唆を得る。

## 3. 研究の方法

### (1)父親の家事参加に関する実証研究

そこで、TRA/TPB 理論を用いた先行研究のサーベイや概念の整理を行い、Gatekeeper 尺度を構築した。Gatekeeper 尺度は実際の夫の家事参加の度合いやパーソナリティとの関連が深いことが知られている。関連指標との相関係数などで確認をとりながら構成概念の検討を行った。そして Gatekeeper 尺度を用いたアンケート調査を実施し、研究を行った。

### (2)男性の家事・子育て参加促進が思わしくない場合の代替策の検討:

第1に、父親の家事参加が進まないのは家事、とくに調理スキルに自信がないからではないかとの仮説のもと、父親の調理力向上を目指した実践活動に取り組んだ。第2に、日本と同様の課題を抱えている東南アジア地域では、どのように解決策がとられているのか、女子労働力率の高い台湾についてサーベイした。外国人労働者をメイドとして雇用活用している台湾に2018年2月訪問し、当事者らと意見交換を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 父親の家事参加に関する実証研究

Gatekeeper に関して、母親を対象としたプリテストを2回(2014年207名:インターネット調査、2015年34名:留置式アンケート調査)実施した上で、母親を対象とした本調査(インターネット調査)を2015年6月7日~6月16日、全国の小学校4年から6年生の子どもがいる母親400人を対象に調査を実施した。「行動面」(文句をいう、配慮する)に加えて「志向面」(アイデンティティ、性別役割分業意識や責任感)を追加して

構築した Gatekeeper 尺度を用いて、父親の家事参加が母親の Gatekeeper や子の社会性に与える影響について検討した。

表1 「志向面」に着目した Gatekeeper 尺度

項目	母親としてのアイデンティティと確認 (=810)	家庭内役割分業 (=735)	性役割の基準と責任 (=836)
「お宅はいつも綺麗にしているね」と言われると、誇りに思う	870	-0.74	-0.085
「あなたは料理が上手ね」と言われると、誇りに思う	761	-1.25	0.32
「良いお子さんね」と言われると、誇りに思う	726	-1.18	-0.089
主婦としての評価は、家がどのくらい整理整頓されているかによる	477	0.98	1.55
主婦としての評価は、子どもの出来によって判断される	445	1.29	1.23
家事や育児をしっかりこなし、周囲からよい母親だと認められたい	425	3.19	0.20
夫は外で働き、妻は主婦業に専念した方が良い	-0.032	0.848	-1.139
子どもの世話に、女性がやった方がよい	-1.150	0.675	1.116
子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念した方がよい	-0.039	0.606	-0.081
家庭内で自分の価値を見出すためには、家事をしっかりこなすことが必要だ	356	4.14	0.50
子どもには、夫より先に私になつてほしい	-0.027	4.07	1.30
料理に関して、私は夫より要求する水準が高い	-0.082	-0.037	9.08
掃除・洗濯に関して、私は夫より要求する水準が高い	-0.041	-0.003	8.39
子どもの躾に関して、私は夫より要求する水準が高い	1.146	-0.012	6.52

共分散構造分析の結果から、Gatekeeper は父親の家事参加に有意にマイナスの影響を与える、「行動面」と「志向面」の関連は高い、「夫が家庭に関われるように配慮している」、「子供が父親と関わって喜んでいることを伝える」といった妻の配慮型志向が家族の適応性を高め、夫の家事参加は家族の適応性・凝集性を高め、それが子の社会性にプラスの影響を与えるという経路を確認することができた。

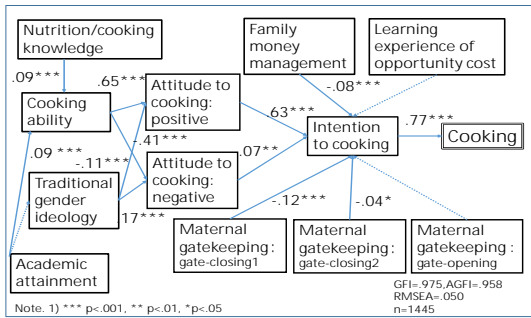


Fig. 1. Factors that affect Japanese fathers' intention to cooking (Takahashi, Kurokawa, & Kuramoto, 2016)

夫の家事参加が妻の出産意欲、就業継続意欲や昇進意欲にどの程度の影響を与えるかに関しては、夫が家事関与すると妻は家事負担の軽減を実感する、妻の出産意欲に有意に影響を与える変数は夫の家事分担であり子育て分担は有意でない (Takahashi & Nakajima, 2016)、夫の料理遂行意欲に有意なプラスの影響を与えるのは、自分は家族のために料理を提供できる、という有能感である (Takahashi, Kurokawa, & Kuramoto, 2016)、夫が家事を

分担し、家族の役にたっていると思えることで、自身の心理的幸福感にプラスの影響を与えている (Takahashi, & Fujii, 2017)、などが明らかになった。ここから、父親が生活を営む上では欠かせない家事に携わることを「当たり前」と捉えるようになると、父親自身の心理的幸福感を高め、妻の出産意欲や継続就業意欲を高めるといった知見を得た。

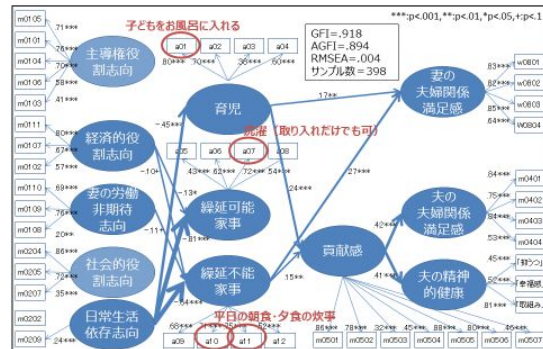


図 2. 家事参加が父親の精神的健康に与える影響 (Takahashi & Fujii, 2017)

(2) 男性の家事・子育て参加促進が思わしくない場合の代替策の検討:

第 1 に、父親の調理力向上を目指して、小学生の子を持つ父親を対象とした調理教室を 3 回実施した (本学助成研究との合同研究)。参加した計 20 名の父親は栄養学・調理学に関する基礎力も高く、包丁を握るのは久しぶりという想定した父親は数名しかいなかった。「なぜ、このタイミングで塩をふるのか」、「隠し包丁の意義は何か」など、調理過程で科学的発問に多くであった。男性に調理を教えるときの貴重なヒントを得た。

第 2 に、東南アジア地域でメイド雇用といえば香港、シンガポールと思っていたが、日本と距離的・文化的に近い台湾で政策として外国人メイドを積極的に活用していることを知り現地調査に赴いた。出身国はフィリピン、インドネシアが多いこと、仕事内容は介護メイドであり育児メイドは少ないことが明らかになった。育児メイドが普及している香港やシンガポール、そうではない日本や台湾に関する社会的・文化的・制度的研究を行うことが新たな課題として抽出された。

その他、新潟で実施したヒアリング調査で、日常的に家事・育児を担当されているという 30 代公務員の自宅を後日、訪問した。機能的な台所、洗濯物の干し方、整理整頓や無駄のない動線など、家事のシンプル化を心がけている生活環

境の実態を拝見することができた。

本助成経費で毎年秋にアメリカで開催される NCFR (全米家族社会学会) に継続して発表・参加することができた。Gatekeeper や父親の家事参加に関心をもつ内外の研究者と意見交換ができた点は、大きな収穫であった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

加藤茂夫・高橋桂子・小林日出至郎・笠井直美・寺井昌人・岸崇・長谷川宏之・井口浩 (2016) 「社会創造科」における協働型学習の効果分析: 附属長岡校園研究開発の取り組み」新潟大学教育学部紀要、人文・社会科学編 9(1), 33-41 [査読無]

Nakano, Yumiko & Keiko Takahashi, 2014a, How to balance work and family: living apart, working together of career-oriented married couples, *Hawaii International Conference on Social Sciences 2014 Proceedings*, Honolulu (May 28-30) [査読あり]

倉元綾子・高橋桂子 (2014b) 「男性の家事・育児参加と子どもの数に影響を与える要因: 厚生労働省「21 世紀成年者縦断調査 (平成 14 年成年者)」に基づいて」『鹿児島県立短期大学紀要 自然科学篇』第 65 号, 1-16 [査読無]

[学会発表] (計 18 件)

Takahashi, Keiko & Mayu Fujii, 2017a, Effects of Japanese fathers' participation of child care and household work on their own marital satisfaction and psychological well-being, IFHE

高橋桂子・田部井美穂 (2017b) 「同期よりも早く出世したい」という昇進意欲に男女差はあるか: 20 代大卒総合職を対象に」日本家政学会第 69 回大会

水野いずみ・菅原育子・細江容子・高橋桂子 (2016a) 「市民アンケート調査にみる男女平等意識: 東京都 H 市のケース」日本家政学会 68 回全国大会

Kuramoto, Ayako, & Keiko Takahashi, 2016b, The Challenges for Practical Problem-Based Learning of Home Economics in Japan, IFHE

Takahashi, Keiko, & Sayaka Nakashima, 2016c, Effects of Japanese husbands' participation of household work/child care on their wives intention to bear children, IFHE

Kurokawa, Kinuyo, Keiko Takahashi, & Ayako Kuramoto, 2016d, Possibility of Family Life Education in social settings in Japan: comparative analyses of fathers with and without home economics education in the secondary education, IFHE

Hosoe, Yoko, Keiko Takahashi, Izumi Mizuno, & Ikuko Sugawara, 2016e, The work life balance gaps in aged people, IFHE

Takahashi, Keiko, Kinuyo Kurokawa, & Ayako Kuramoto, 2016f, Japanese fathers' intention to cooking and maternal gatekeeping, NCFR Annual Conference

Kuramoto, Ayako, Kinuyo, Kurokawa, & Keiko Takahashi, 2015, Fathers' attitudes toward cooking and Family Life Education in Japan, NCER Annual Conference

Nakano, Yumiko & Keiko Takahashi, 2014a, How to balance work and family: living apart, working together of career-oriented married couples, *Hawaii International Conference on Social Sciences*

黒川衣代・高橋桂子・倉元綾子 (2014b) 「既婚男性の「家族・家庭生活」に対する家庭科教育効果の認識: 履修タイプによる比較」日本家庭科教育学会第 57 回大会

Takahashi, Keiko & Kinuyo Kurokawa, 2014c, What factors affect the intention to participate in the household work of married men in Japan? : a qualitative study, XVIII International Sociological Association

Kurokawa, Kinuyo, Keiko Takahashi, & Ayako Kuramoto, 2014d, Is Family Life Education at school in Japan effective for Japanese fathers? NCFR Annual Conference

高橋桂子・倉元綾子 (2013a) 「父親の家事参加意図に影響を与える要因の検討: 新潟市内全保育園調査から」日本家政学会第 65 回大会

倉元綾子・高橋桂子 (2013b) 「家政学・家庭科における実践性の検討 - コ・テムジョン, イ・スヒ著『実践的問題中心家庭科授業 - 理論と実践』を手がかりとして -」日本家政学会第 65 回大会

高橋桂子・倉元綾子 (2013c) 「韓国・家庭科における実践的推論プロセスにもとづく授業展開

の事例報告」日本家庭科教育学会第 56 回大会  
倉元綾子・高橋桂子(2013d)「韓国・家庭科に  
おける実践的推論プロセスにもとづく授業の導  
入」日本家庭科教育学会第 56 回大会

Takahashi, Keiko, Kinuyo Kurokawa, & Ayako  
Kuramoto, 2013e, Factors affecting Japanese  
fathers' intention of doing household work,  
NCFR Annual Conference

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 桂子(TAKAHASHI, Keiko)

実践女子大学・生活科学部・教授

研究者番号:50311668

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

なし